

ええやん!

# 大津絵 欧州目線で迫る



## 仏教授が調査、出版

江戸時代に近江(滋賀)で生まれた絵画「大津絵」を研究するフランス国立東洋言語文化大教授、クリストフ・マルケさん(51)が先月末、大阪府八尾市に残る江戸後期の会所屋敷跡・旧植田家住宅に伝わる大津絵を調査した。仏語版の自著を改訂・邦訳した『大津絵 民衆的諷刺の世界』(角川ソフィア文庫)も刊行したばかりで、大津絵の歴史と魅力を内外に発信している。(井上晋治)

同住宅は一般公開施設。江戸期から管理した植田家当主は文化人で、住宅には茶道具などと共に、型紙を使って刷られた大津絵が計33点残る。いずれも鬼に豆をまかれる七福神の大黒や、鼻の長さを競うテングと象など滑稽味豊かで素朴な絵柄で、主題に合う教訓的な内容の道歌(和歌)も余白に記され、近くの寺子屋の教材になったという。当初は仏画として描かれた大津絵は、東海道の往来が盛んになるのに

伴い、多くの旅人や庶民に行きわたるようになった。また、道歌を添えた教訓絵や護符など、時代と共に用途も変化していった。33点は半紙に描かれており、裏側にも道歌を記した短冊などが貼ってある。マルケさんは「教材としての使用が実際にわかるものは珍しい。江戸後期になると大津絵は売れなくなって、別の役割が与えられたことを証明する貴重な史料だ」と評価している。

『大津絵——』は、大津絵の歴史と明治時代以降の再評価の動きに着目した著書だ。特に、後世に伝えるために江戸期の面題を模写し、1920年に大阪で版画集を刊行した篆刻家、楠瀬日年の業績に注目。版画集の78種をカラーで掲載した。

「日年の版画集は、戦前に日本に滞在したフランスの先史学者アンドレ・ルロワール・グランも入手するなど、欧州で大津絵の認識を広める役割を果たした」とマルケさん。今年7月には、先月まで勤めた東京の日仏会館で、大津絵の研究成果を披露する初の国際シンポジウムを開催。スペイン・バルセロナの研究者からは、1950年に同地で開かれた日本民芸展に日年の版画が展示され、著名な画家ジョアン・ミロらも鑑賞したことなどが報告された。

江戸期の大津絵を手本に、自身の名義で日年が行った自由な創作活動に対し、無銘の芸術性を重んじた民芸運動のリーダー柳宗悦は批判的だった。だがマルケさんは「近代化で消滅の危機にあった大津絵を残そうとした日年の功績はもっと評価されている」と話している。

【右】 旧植田家住宅所蔵の大津絵を調査したクリストフ・マルケさん(大阪府八尾市で)  
 【左上】 楠瀬日年が模写した大津絵「竹に虎」  
 【左下】 画家ジョアン・ミロ(右)が1950年、バルセロナで開かれた日本民芸展を訪れた時の写真。背後のポスターに「竹に虎」が使用されている(ジョアキム・ゴミス撮影、個人蔵)